

出雲国風土記

ハンドブック

島根県古代文化センター

📖 風土記を学ぶ

出雲国風土記全体について本文を掲載し、解説した本には、以下のようなものがあります。

- ・加藤義成 校注『出雲国風土記』
松江今井書店
- ・荻原千鶴 全訳注『出雲国風土記』講談社
- ・島根県古代文化センター編
『解説 出雲国風土記』今井出版

🚶 風土記を訪ねる

[出雲国風土記の内容を紹介した博物館]

- ・島根県立古代出雲歴史博物館
出雲市大社町杵築東99-4 電話 0853-53-8600
- ・島根県立八雲立つ風土記の丘展示学習館
松江市大庭町 456 電話 0852-23-2485

[出雲国風土記登場地について]

風土記に登場する県内約130か所について、案内の標柱を設置しています。



発行 島根県教育委員会

編集 島根県古代文化センター

〒690-8502 島根県松江市殿町1番地

電話 0852(22)6725

出雲国風土記の神話・説話を読む

『古事記』や『日本書紀』に匹敵するほど古く、

古代出雲についての歴史書よりもたくさん情報がある『出雲国風土記』。誰もが知りたい、古代出雲の謎に迫るための基本文献と言ってもいいでしょう。

『出雲国風土記』の全体を紹介する前に、主立った神話・伝承を紹介してみよう。

国引き神話

壮大な国土創世神話 意宇郡

私たちの住んでいる国土はどのようにできたのだろうか？ だれもが一度は想像を巡らすであろう疑問について、『出雲国風土記』は『古事記』や『日本書紀』とは違った神話をのせています。現在、われわれが国引き神話と呼んでいる、出雲国の成り立ちを語った神話です。

国引き神話のストーリー

国引き神話とは、直接は現在の松江市にあった「意宇」という地名を説明した神話です。

八東水臣津野命は、出雲国をみて八雲立つ出雲国は若くて小さい国だ、大きな国にしようと思ひ、新羅をみると国に余りがあるのので、大きな鋤で国を切り分け、しっかりと綱を結びつけて引き寄せよう、と引いて引き寄せた。これが「八穂米支豆支の御埼」今の出雲市大社町など島根半島西部である。こうして各地から国の余りを引き寄せ、つなぎ合わせ、その仕事がおわつたとき、「おえ」と引いて杖を衝いた。その場所が杜になって今も残っている（意宇杜）。

そして、そのとき引いた綱は、「蘭の長浜」（出雲市西部の海岸線）と「夜見島」（鳥取県の弓ヶ浜半島）で、つなぎ留めた杭は、佐比売山（三瓶山）と火神岳（大山）である。



変わらぬ国土と神話の舞台

国引き神話は実際の出雲の地勢から想像力を膨らませたスケールの大きな神話で、実際に出雲を訪れるとだれでもその舞台を目にすることが出来ます。そして奈良時代において、出雲のような日本列島の特定の地域の成り立ちをまとめた形で記した神話は、この国引き神話が唯一なのです。

リズミカルな口承文芸

『出雲国風土記』の原文は、非常にリズミカルで躍動感にとむ名文です。おそらく口づてに伝えられた神話をそのまま文章にしたのでしょう。音読して古代出雲びとの神話世界を追体験してみよう。

国引き神話 全文

意宇郡条

意宇と号くる所以は、国引き坐しし八東水臣津野命の詔りたまひしく、「八雲立つ出雲の国は、狭布の稚国なるかも、初国小く作りせり。故、作り縫はな」と詔りたまひて、「拷衮志羅紀の三埼を、国の余ありやと見れば、国の余あり」と詔りたまひて、童女の胸鉤取らして、大魚の支太（鯉）衝き別けて、波多須支（幡薄）穂振り別けて、三身の綱打ち掛けて、霜黒葛聞耶聞耶（緑るや緑るや）に、河船の毛曾呂毛曾呂に、「国来、国来」と引き来縫へる国は、去豆の折絶よりして、八穂米支豆支（杵築）の御埼なり。かくて堅め立し加志（杭）は、石見国と出雲国との堺なる、名は佐比売山、是なり。亦、持ち引ける綱は、蘭の長浜、是なり。「北門の佐伎の国を、国の余ありやと見れば、国の余あり」と詔りたまひて、童女の胸鉤取らして、大魚の支太衝き別けて、波多須支穂振り別けて、三身の綱打ち掛けて、霜黒葛聞耶聞耶に、河船の毛曾呂毛曾呂に、「国来、国来」と引き来縫へ

る国は、多久の折絶よりして、狭田の国、是なり。亦、「北門の良波の国を、国の余ありやと見れば、国の余あり」と詔りたまひて、童女の胸鉤取らして、大魚の支太衝き別けて、波多須支穂振り別けて、三身の綱打ち掛けて、霜黒葛聞耶聞耶に、河船の毛曾呂毛曾呂に、「国来、国来」と引き来縫へる国は、三穂の埼なり。持ち引ける綱は、夜見島なり。固堅め立し加志は、伯耆国なる火神岳、是なり。「今は国引き訖えつ」と詔りたまひて、意宇杜に御杖衝き立てて「意恵」と詔りたまひき。故意宇という。謂わゆる意宇杜は、郡家の東北の辺、田の中にある塾、是なり。周り八歩許、其の上に木ありて茂れり。



国引き神話の綱（蘭の長浜）と杭（三瓶山）

恋山のワニ

(仁多郡)

出雲の山間部、仁多郡(現在の奥出雲町)に伝わる説話はいへん短いものですが、ここにも出雲のいにしえ人がなぜ?と思っただ不思議な神話となって残っています。

恋山のあらすじ

日本海にいたワニ(サメ)が、阿伊村にいた玉日女を慕って川を溯ってきたが、玉日女は大石で川をふさいでしまったのでワニは玉日女を恋(した)うばかりで会うことができなかつた。なので恋山という。

神話の舞台

現在、鬼の舌震(ワニの恋が詛つたもの)と呼ばれる巨石の点々とする溪谷がこの神話の舞台です。人々にとつてこの景観は、人智の及ばない神々のなせるわざと感ぜられたのでしよう。そこから、その景観を説明する神話が生まれたと推測できます。

所造天下大神

あめのしたつくらしのおおかみ

この説話の主人公、所造天下大神とはどのような神なのでしょう。その名前の通り、天下をおつくりになった大神という意味で、オオクニヌシの神を意味します。『出雲国風土記』には、オオクニヌシの神が最も多く登場し、その活動が奈良時代の出雲のいろいろな地名の起源とされています。『古事記』『日本書紀』では日本の国造りの神として登場するオオクニヌシの神ですが、特に出雲では全域でその土地土地に信仰が深く刻まれていたことがわかります。オオクニヌシの信仰圏と出雲は密接に関係しており、『出雲国風土記』はまさに出雲の成り立ちを考えるうえで最重要な史料のひとつであると言えるでしょう。

なぜワニか？

いっけんすると、海から遠く離れた奥出雲にワニ(サメ)が登場するのは不自然な気がします。しかし、中国地方の山間部ではサメは郷土料理の食材として今も食べられています。これはサメの体内には死後アンモニアが残り、腐敗しづらいからで、保管技術が未発達な古代では、内陸ではサメとは海の魚を代表するものだったのです。

この短い神話にも、奈良時代の生活が的確に反映されているのです。

風土記のつながり

この恋山に類似する伝承が、『肥前国風土記』の佐嘉郡(今の佐賀市)にもあります。こちらは嘉瀬川上流の世田姫と呼ばれる石神(巨石)に、海の神(サメ)が年に一度溯つて会いに来るといふものです。恋山の話も本来は海と山の神がであう話だったのかもしれない。

加賀郷・加賀神埼の伝承

(島根郡)

島根半島には風光明媚な海岸線が続きますが、『出雲国風土記』にはこの浜や島、あるいは岬についてのたいへん詳細な記載が残されています。これは、当時の人々にとつて、沿岸の漁業の舞台であったためと考えられ、加賀神埼とよばれた現在の松江市島根町の加賀の潜戸には、興味深い神話のこされています。

伝承

加賀神埼には窟がある。ここはいわゆる佐太大神がお産まれになった所である。御子神がお産まれになろうとする時、弓矢がなくなった。母神である枳佐加比売命が「わたしの御子が麻須羅神の御子ならば、なくなった弓矢よ、出て来なさい」と祈願すると、最初角の弓矢が流れ出た。これを投げ捨てると、次に金の弓矢が流れ出て来た。そこで「暗い窟である」といつて射通しなされた。このとき光輝いたので、加賀というようになった。

穴道の由来

(意宇郡)

現在の松江市穴道町、あるいは穴道湖に名前を残している地名穴道。この地名の由来も、『出雲国風土記』に伝えられています。

穴道の由来

穴道郷には所造天下大神命(オオクニヌシ)が、狩りで追いかけた猪の像が、南の山に二つある。一つは周り五丈六尺(二七尺)、もう一つは周り四丈一尺(二二尺)。猪を追う犬の像もある。石となつているが猪と犬以外のなものでもない。このように猪を追いかけたさまが残ることから、当地を穴道という。

神秘的な猪の像

この説話は、記載されているように大きくそして不思議な形をした石がもとになつて地名となつたといふものです。そしてその石の由来が神の行為として説明されています。

垣間見られる出雲の習俗と、壮大な神話体系

加賀には『出雲国風土記』の記載どおりの長大な海蝕洞窟(加賀の潜戸)があり、この不思議な造形を説明した神話です。説話は、母神が御子の父神について予言し、そのとおりになると、母神は窟を弓矢で貫通させ、光り輝かせるといふ偉大な力を発揮します。このように、まず誓いを立てその通りになるかどうかで事の善悪や正否を判断することを誓約と呼びますが、加賀神埼の説話からは、古代出雲にも同じような習俗があったことが窺えます。

また、この神話は佐太大神の誕生の説話でもあります。佐太大神は現在の松江市鹿島町の佐太神社の祭神で、島根半島東部で広く信仰されていました。説話では「生まれた場所」としてしか登場しませんが、本来はこの佐太大神をめぐる、壮大な神話体系があり、その一部が加賀神埼に収録されているのです。このように、『出雲国風土記』からは、かつてそれぞれの地域が持つていた豊かな神話の一端を知ることが出来ます。



鬼の舌震

加賀の潜戸

出雲国風土記とは何か

このパンフレットで紹介する『出雲国風土記』とは、ひとことでは、奈良時代の天平五年(七三三)に完成した、今の島根県東部、出雲国について記した地誌(地理を紹介した本)です。この『出雲国風土記』にはどんな価値や特色、魅力があるのでしょうか。

古事記・日本書紀と並ぶ 古代出雲の詳細な記録

今から約一三〇〇年前の奈良時代の和銅六年(七二二)、全国六〇余りあったそれぞれの国に対して、その地方の地名の由来、特産物、古老の伝承などを調査、報告するよう命令が出されました。この命令に従って出雲国で編さんされたのが『出雲国風土記』で、命令の二〇年後、天平五年(七三三)二月三十日に完成しました。日本で記された古い書物には『古事記』(七二二年完成)や『日本書紀』(七二〇年完成)がありますが、それらに匹敵するほど古い書物が『出雲国風土記』を含む諸国の風土記なのです。また、『古事記』や『日本書紀』が当時の政治の中心、近畿地方の貴

族の手によって編さんされたのと異なり、風土記は各国の現地で編さんされました。このため、風土記には『古事記』や『日本書紀』には記されていない地方の情報が、たいへん詳細に記されています。

失われた風土記

各国で編さんされた風土記も、平安時代には既になくなってしまったようです。そして、現在とまったかたちでこのこっているのは『出雲国風土記』と常陸国(今の茨城県・播磨国(兵庫県西南部)・豊後国(北部を除く大分県)・肥前国(佐賀県・壱岐と対馬を除く長崎県)の五か国の風土記だけです。そして、このうち、出雲以外の四か国の風土記には脱落した部分があったり、現在に伝わるものが省略本であるなどして、『出

雲国風土記』だけが全国で唯一ほぼ完全な形で残っているのです。

出雲国造による編さん

また、『出雲国風土記』には、ほかの風土記にはない特色があります。それは、編さん者が、都から派遣された役人である国司ではなく、出雲の豪族、出雲国造出雲臣広島という人物であることです。風土記は現地で編さんされたのですが、『出雲国風土記』については、とりわけ多くの地元出雲からの視点が盛り込まれています。このように、地方の視点から記述された奈良時代の書物はほかになく、『出雲国風土記』はかけがえない価値を有しているのです。



風土記編さんの経緯

都・朝廷

〈風土記撰進の命令の内容〉

- 一、地名に好ましい漢字を用いなさい
- 一、物産品目を報告しなさい
- 一、土地の肥え具合を報告しなさい
- 一、山川原野の名と、その由来を報告しなさい
- 一、古老が伝える土地の伝承を報告しなさい

諸国

713年
編さん令

撰上

『出雲国風土記』の完成は天平5年(733)で、唯一完成した年が正確にわかっています。

常陸：717~723年頃
播磨：715年頃
豊後：732~739年頃
肥前：732~739年頃

現存する五風土記



『常陸国風土記』
島根県立古代出雲歴史博物館所蔵

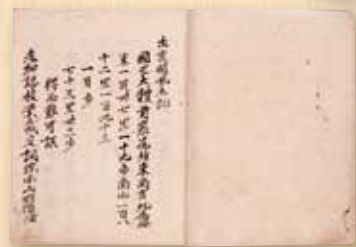
播磨国
(現在の兵庫県西南部)

豊後国
(現在の北部を除く大分県)

肥前国
(現在の佐賀県・長崎県
ただし壱岐・対馬を除く)

『豊後国風土記』
島根県立古代出雲歴史博物館所蔵

『出雲国風土記』の写本



『出雲国風土記』最古の写本 細川家本
慶長2年(1597)書写
(東京都 永青文庫所蔵)



『出雲国風土記』の写本
(右 岸崎氏本 個人蔵
左 日御碕本 日御碕神社所蔵)

『出雲国風土記』の原本は失われており、現在は写本の形でその内容が伝えられています。最古の写本である細川家本や日御碕神社所蔵の写本(日御碕本)が有名です。